

リズムがスクラムを組み、Made in NOTOをうまく組み合わせた新しい魅力も加えれば、能登半島は個性のある魅力であふれる魅力半島になる。

外から見れば、能登は能登でしかない。能登にやって来るのであって、どこに境界線があるかわからない市町村単位に来るのではない。能登というブランドでいかななくてはならない。能登に来れば、能登の地場商品を使った、オンリーワンの魅

力ある能登に出会えるようにすれば、ほっといても人が寄ってくる。その居心地が良ければ、リピーターとなり、友人知人を連れて来、能登ファンになってくれる（さらに、私のように移り住んでしまう）。大工場も原発も来ないのだから、よそ者を呼べる環境づくり＝魅力付けから始めましょうよ。ツーリズムは人寄せの手法ではなく、魅力付けの結果なのだから。



株式会社まちづくり輪島
代表取締役社長
中 浦 政 克

輪島のまちづくり

能登半島・輪島

輪島は、古くから奥能登の中核都市として繁栄してきたまちである。中世以来、「親の湊」として栄え、江戸時代には北前船が入出し、輪島塗や輪島素麺などの地場産品が積み出されていた。昭和に入ると鉄道が開通し、生活交通に加え輪島塗等を貨車に積み込み各地へ輸送する物流手段としても定着した。また昭和40年代に入ると、能登観光ブームが到来し、輪島駅は多くの観光客でごったがえす事となり、宿泊施設の不足から民泊で一夜を凌ぐ客も大勢いた。その後、能登有料道路開通をはじめ道路整備が進み、平成に入ると、バブル経済とともに輪島観光もピークを迎える事となる。

平成15年7月には能登空港が開港した。前記の歴史的な繁栄とは裏腹に、しばしば「陸の孤島」と例えられるように遠隔地のイメージが拭えなかった能登半島。しかし、能登空港の開港は、能登半島を身近にするばかりでなく、その魅力を掘り起こし、高め、発信しようとする能登各地の地域づくりに弾みをつける形となった。輪島もその例

外でなく、様々な取り組みを進めている。その現状に触れてみたい。

輪風（わふう）

輪風とは、輪島特有の文化や資源、生活様式が表現されている事であり、それらをまちづくりに活かしていく事が輪島のまちづくりの特徴であり羅針となっている。このコンセプトが確立されたのは、平成8年度から進められている輪島・都市ルネッサンス石川都心軸整備事業によるものである。道路拡張とともに沿道のまちなみを整備し、ソフト施策を展開することにより賑わいを再生しようとする事業である。平成13年3月に廃線となったのと鉄道輪島駅から朝市までの市道を活性化軸と位置づけ整備を進めている。沿道では道路拡張による建築物の建替えにあわせ、まちづくり協定のルールに基づいた建築物が軒を連ねている。また、住民、来訪者が交流できる施設の整備や商店街による仕掛けづくりも進められており、この事業の着手が輪島のまちづくりを加速させたと言える。そして、現在も輪風まちづくりの「杭」として、その役割を果たしている。

輪風のまちづくりは、平成11年度に策定された輪島市中心市街地活性化基本計画、平成13年度に策定したTMO構想の基本概念ともなっており、その展開が広がりを見せているところである。廃線となった鉄道駅に代わる道の駅「ふらっと訪夢」は、地元材による木造建築に拭き漆が施され、木組みの吹き抜けを現し、輪風のターミナル空間に

加え様々な交流機能も備えている。

また、平成15年に竣工した輪島工房長屋は、漆文化の発信拠点である。5棟からなる工房には、木地づくりから上塗り、蠟色までの様々な工程を職人と語らいながら見る事が出来るほか、輪島塗、特産品の買い物や地物の食事を楽しむ事も出来る。新しい輪島の情報発信基地として期待が寄せられているところである。

輪島工房長屋に隣接するわいち商店街は、平成10年から賑わいの道づくり事業に取り組んだ。商店街区域の道路を歩行者優先の道路に整備し、人の集まる空間づくりにより賑わいを創出することを目的としている。前記の輪島・都市ルネッサンス石川都心軸整備事業区域の延長線上にあり、輪島工房長屋を包括するエリアとして整備が進められた。電線類の埋設、歩行者退避帯と歩行空間の確保、バリアフリーステーションの設置、植栽、小公園整備を行い、朝市からの回遊性確保とイベント等による非日常的な空間演出が可能となっている。また、個々の店舗に依存する町並みは、平成8年度から取り組んだ石川県活性化モデル商店街支援事業によるモデル店舗の整備により着手した。モデル店舗設置から5年間の事業展開により、統一感のある町並みが整いつつある。

そして、平成15年度、朝市通りにおいても電線類の埋設、自然石張の道路整備が進められた。これにより、平成8年に始まった中心市街地活性化軸整備は全ての区間において着手された。また、整備エリアを拡大し、輪島塗を生業とする塗師の家で町並みが形成されている鳳至上町地区のまちなみ景観保全や蔵を利用した交流施設の設置を行うなど、伝統的まちなみを活かした取り組みも行っている。

輪島のコミュニティ

輪島のまちづくりが急激に進んだ背景には、地域的な特性がある。輪島には、大小のコミュニティが数多く存在する。他地域で存在する経済団体や町会組織のほかに頼母子講などが盛んであり、

神社を中心とした祭組織や厄年を迎える男たちの御当組など多くの繋がりで人と人の関係が成り立っている。とりわけ、地域を起こす活動に関しては、NPO団体や青年グループにより多くの事業が展開されている。その中心的な役割を果たしているメンバーが多くのコミュニティとの繋がりを活かし、まちづくりの推進役となっているのである。

輪島は、海と山に囲まれた地形により商圏は閉ざされていた。モータリゼーションの進展により、その商圏は拡大されたが、少子高齢化による人口減少をたどる能登地域においては、定住人口に加え交流人口の拡大を図ることが重要な課題である。そのため、観光事業者に限らず交流人口拡大は誰もが切望しているところだ。そして、住民の総意とも言える交流人口の拡大に向けて、様々なコミュニティが競うように取り組みを行ない、多くの住民がまちづくりに関わってきた。能登空港開港という大きなプロジェクトが住民の心を捉え、様々なコミュニティが一丸となった成果が現れているのである。

ソフトの充実

輪島のまちづくりは、次の一手を打つべき時に来ている。能登空港開港を合言葉に半ば環境形成先行型で進められたまちづくりには、利用システム、次代への引継ぎをどうするか等、積み残した課題がたくさんある。言わば、これからが本番なのである。

住民参加のまちづくりが言われて久しいが、本当の住民参加は自らの暮らしぶりを考える事から始まる。それは、年齢、性別、家族構成、職業の違う多様な住民がまちを愉しみながら暮らし、良好な環境を維持する事であり、来訪者にも心地よい時間を提供できるまちを築くことが必要だからである。

輪島における中心市街地活性化の方向性は、生活者と来訪者の満足度を高める事である。それを達成するためには、生活者と来訪者に立脚した取り組みが必要であり、環境形成が進む輪島におい

てはソフト面での取り組みが重要となっている。

能登のネットワーク

大自然に生まれ、豊かな食と文化を有する能登半島。そこには四季折々に様々な祭、食、風景、暮らしがあり、それぞれの地域でがんばっている人々がいる。そして、能登空港開港を前に能登でがんばる人々が会した。それが、NPO法人能登ネットワークである。能登半島をひとつの地域に見立て、数多くある資源を共有し、県内外に向けた情報発信をしながら事業を展開している。関東からの地酒列車運行や能登の魚醤である「いしる」をテーマにフォーラムを開催するなどして、能登の魅力発信に取り組んでいる。

交流人口の拡大は一地域の力量では限界がある。また、能登半島は県外から見れば一地域に過ぎない。だからこそ、能登のネットワークが重要なのである。能登半島における経済的循環が大きな環とするなら、輪島をはじめ各地の経済的循環は小さな環といえるだろう。大きな環と小さな環がそ

れぞれに担う役割は違うが、相互に繋がりと重なりをもって地域の課題に取り組んでいくことが必要だと考えられる。

さいごに

モノの豊かさから心の豊かさが重要視される現代において、輪島には多くの有形無形の財産があふれている。海の幸、山の幸、四季折々の地物でつくる郷土料理は安全安心で豊かな食生活を提供してくれる。黒瓦が連なる木造の家々は、あての木に拭いた漆の香りが安らぎの時間を与えてくれる。

身近なモノ・事を楽しむ暮らしぶりは、来訪者にとっても魅力的なものであり、輪島らしさを感じることが出来るだろう。自らの暮らしぶりが多くの来訪者を呼びこむ魅力的な地域をつくることを忘れてはならない。そして、環境が整いつつある「まちなか」を中心に定住者と来訪者の交流を生み、経済の循環に繋げることが輪島のまちづくりの行き着くところではないかと考えるのである。



(特)金沢創造都市フォーラム/
(株)計画情報研究所
米 田 亮

癒しの半島の可能性と課題—— 『珠洲まちづくりシンポジウム』 の成果をふまえて

珠洲への想い

大学生の頃、車を運転して珠洲に行った。僕にとっての珠洲初体験である。当時つきあっていた彼女が珠洲の出身で「一度実家に遊びに行こう」という話だった。彼女のほうはすでに働いていたが、僕は学校にもあまり行かず、バイトをしながら、ちゃらんぽらんな生活を送っていた。「今は

まだご家族に会うような立場じゃないような気がする」などごまかして、なんとか実家訪問はまぬがれたが、珠洲をいろいろ案内したいという彼女の思いもありドライブに出かけたのである。能登有料を下りてから、どこをどう通ったのか、海岸線をかなり長く走った記憶がある。

「たまに帰ってくると、ほっとする。でも働くところも、遊ぶところもないんだよね〜」。目の覚めるような真っ青の海と空を見ながら彼女がつぶやいた一言が印象的で今も憶えている。

シンポジウムを開催しよう！

金沢創造都市フォーラムは、以前金沢大学で教鞭をとられていた佐々木雅幸教授(現大阪市立大学大学院教授)が中心となり、大学の関係者、民間の研究者、そして都市や地域に関心のある方々が集まるNPO法人である。